

第三の 카테고리 研究の種を発掘するための調査研究

令和4年度活動計画

科学と社会研究会

(事務局 公益財団法人日本学術協力財団)

(協力助成計画会議準備会)

我が国において科学者（自然科学のみならず人文・社会科学を含む。）が得る研究資金には、

① 文部科学省の科学研究費など各省の研究費制度による国の研究費（これによる研究を「第一カテゴリーの研究」と呼ぶ。）

② 産学共同研究や委託研究など産業界の支援（これによる研究を「第二カテゴリーの研究」と呼ぶ。）

がある。

これらによる研究は出資者の意向に沿うことが義務づけられており、しかも、我が国においては、特に、すぐ役に立つ成果が求められている。また、「第一カテゴリーの研究」はこれまでの科学の展開の中で確立されてきた分野を中心に助成がなされ、「第二カテゴリーの研究」は明確な目的を達成するために、実証された科学の成果を用いることが多い。このため、研究は所定の枠内でしか行えず、この枠から外れた「純粋な好奇心」に基づく研究（第三カテゴリーの研究）は研究費を獲得できない現状がある。

しかし、人類にとっての普遍で不変の財宝である科学の知識体系は「純粋な好奇心」によって生み出されてきたものであることを考えると、これら「第三カテゴリーの研究」の助成をすることが極めて重要である。

①、②とは異なる研究資金として助成財団による研究助成がある。これは、財団の設立趣旨に則った助成であり、①と類似している。しかし、大枠は決まっても財団が固有の思想をもって自律的に課題を定めて助成するケースがある点が、①とは大きく異なる。つまり、助成財団は第三カテゴリーの研究が大枠で財団の設立趣旨に則っていれば、その研究に対し助成できる余地がありそうである。そこで、助成財団等の関係者によって組織された「協力助成計画会議準備会」では、助成財団による新しい助成の仕組みをつくるための検討を続けてきた。

「第三の 카테고리 研究の種」については、公益財団法人日本学術協力財団に設置された「科学と社会研究会」において発掘する努力を行ってきた。これまでの検討により、その候補としては、

- (1) 「近代発展規範（民主主義・市場原理・科学的論理思考）の揺らぎの本質の解明
一近代社会規範の再構築を求めて一」
- (2) 「科学・技術が関与する課題解決の活動サイクルが進展するための組織構築の在り方を探る：
認知症を対象として」
- (3) 「Physiological Birth への影響に関する学際的研究」

(4) 生物学と経済学の境界領域に関する調査研究

などが挙げられている。

これらの候補は、現段階では科学研究費や研究助成財団の研究費の応募できるレベルまで具体化されていないものが多い。このため、日本学術協力財団では、令和2年度から令和4年度までの3か年計画で「種」の候補について課題探索研究を行い、本格研究として研究助成に応募できるレベルまで具体化させることを目的とする「第三のカテゴリー研究の種を発掘するための調査研究」プロジェクトを実施しているが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響から、全体計画を令和5年度までの4か年計画に延長することとした。

令和4年度活動計画（案）

令和2年度からは(1)及び(2)について、令和3年度からは(3)及び(4)について課題探索研究を行ってきたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響から、当初想定していたスケジュールに沿った研究の遂行が困難となり、次年度以降への繰越しを行わざるをえない状況となった。

このため、令和4年度においては、これら計4件について引き続き課題探索研究を行い、本格研究としての応募に向けた「種の発掘」を行うこととする。また、新型コロナウイルス感染症の状況も踏まえつつ、新期研究課題の設定について検討を行う。

(1) 近代発展規範（民主主義・市場原理・科学的論理思考）の揺らぎの本質の解明

：近代社会規範の再構築を求めて

代表者 黒田昌裕（慶應義塾大学名誉教授）

経費総額 200万円

(2) 科学・技術が関与する課題解決の活動サイクルが進展するための組織構築の在り方を探る

：認知症を対象として

代表者 狩野光伸（岡山大学大学院ヘルスシステム統合科学研究科教授）

経費総額 100万円

(3) Physiological Birth への影響に関する学際的研究：Fetal microchimerism とつわりとの 関連性を探索するためのデルファイ調査（フェーズ1）

代表者 新福洋子（広島大学大学院医学研究科教授）

経費総額 100万円

(4) 生物学と経済学の境界領域に関する調査研究

代表者 岩崎 渉（東京大学大学院新領域創成科学研究科教授）

経費総額 190万円

※協力助成計画会議準備会とは

「科学と社会研究会」から、前記第三カテゴリーの研究テーマに至る前の段階で、その種を見出すための調査研究「課題探索研究」、言い換えれば、種を本格研究として研究助成に応募できるレベルまで具体化させることを目的とする「第三のカテゴリー研究の種を発掘するための調査研究」が極めて重要であることについて問題提起がなされた。

その重要性に鑑み、種探しの調査研究に対する資金的な支援を行う方法、および種を見出した後に本格研究として研究助成に応募していく流れについて、科学と社会研究会の関係者と助成財団等の関係者(研究助成財団懇談会の幹事5財団)によって組織された「協力助成計画会議準備会」ではその仕組みについて検討を続けてきている。